

読み聞かせて欲しい被爆体験記

竹本成徳……日本生協連会長

2012-08-04
NHKラジオ
明日へのことば

昭和20年(1945)8月6日、午前8時15分17秒…。

一発の原子爆弾が落とされて広島市の町は一瞬にして灰塵と化した。その時間、わたしは爆心地からわずか1キロ離れた広島市役所庁舎の西側にある植え込みの中にいた。広島修道中学の二年生、近距離にいたが奇跡的、無傷だった。

「ピカッ、ドーン！」と、ものすごい光とものすごい音がしたかと思うと、まわりは一瞬のうちに真っ暗になってしまった。「やられたァー」と、叫ぶ声も聞こえた。そのときになって、初めて空襲でやられたのだということがわかった。その真っ暗やみのなかを、何時間も逃げ歩いた。逃げる途中で、死んだ人、大やけどをした人も数え切れないほど見た。

どうしてわざわざ火の出たほうに向かっていこうとしたかというと、呉から通学していた友人の話を聞いていたから。広島に原爆が投下される二週間ほど前、呉が空襲でやられていた。

友人は海軍中將の息子で、父親から聞いた米軍の空襲のやりかたを、どこまかにわたしに教えてくれていたのだ。それによると、まずB29は街の周辺をとり囲むように、円形に焼夷弾を落とす。まわりをぐるっと囲むのは、市内にいる人びとが外へ逃げられないようにするため。そして袋のネズミの状態にしておいて、こんどは縦横十文字に街を焼いていくのだということだった。ですから、このまま街の中心部にいたのでは焼き殺されてしまう。どんな危険を冒してもまわりをとり囲んでいる火を一度ぐぐって、間隙をぬって逃げなければならぬと思った。瓦の下から、「助けてくれエ！助けてくれ！」という叫び声が聞こえたがどうしようもなかった。

いきなり二人の中学生がわたしにしがみついてきた。「僕たちを連れて逃げてください」みると二人とも全裸。腰にベルトだけがのこっている。皮膚は焼け爛れて、ボロ雑巾がぶらさがったように垂れ下がっていた。もちろん足は裸足で、わたしは幽霊を見たかと思ったほどだ。

しかし、結局は火をくぐり抜けて市外にでなければ助からないと決心して、なおも南の方向を目指した。しだいに火の手が近づいてきた。ものすごい熱さ、なんともいえない熱さだ。いっしょに逃げている二人の中学生も、「あつーい、あつーい」と叫んだ。可哀想でしたが火を抜けなければ死んでしまうので……

私は火の中へ突っこんで行くのを嫌がる二人を励ましながら、必死の思いで火を超えていった。その火の中から女の人が出てきて、私にすがりついた。振りほどこうとしても、私の衣服をしっかりとつかんで、放そうとしない。「私の子が火の中にいるんです。お願いします。助けてエ！」子供、と聞いて私はクラクラするような思いだったが何も出来ない。

一緒だった中学生とはいつの間にかはぐれてしまった。

結果的に、火に向かって逃げた事が幸いした。中心部に向かって逃げていった女学生たちは、おそらく焼け死んでしまっただろうと思う。しばらく進むと、道の左側に井戸水をくみあげる手押しポンプがあり、その前に居た中年の男の人が私を見つけて、「すまんけど、このポンプで水を汲んでくれんか」というのだ。見ると、その人の頭はパツクリとふたつに割れて、体は前を向いているのに、頭の片方が横にいる私のほうを向いているのだ。「わしはもう目がみえん」その人はボツリといった。

まだ敵の艦載機が飛んできて、機銃掃射をくりかえしていた。艦載機はパイロットの顔が見えるぐらいの低空飛行をしてきて、バリバリと機銃を撃つと、弾が風を切って飛ぶヒュンヒュンという音が、耳のすぐ横をかすめるのだ。

土手を下っていくと、すぐ近くで、「たけもと！」と叫ぶ声がした。「おまえはだれや」ときくと、「おれや、おれや、川端や」と答えた。今朝までいっしょだった親友だ。ところが、まじまじと見てもわからないほど顔がかわってしまっていた。

わたしは陸軍病院からもう一度、榊本くんの家に戻って、おにぎりをふたついただいで食べた。それから天満川、太田川の放水路とわたって、やっとのことで広島から下関に通じる国道二号線に出た。ここまでくれば、わたしの家まではあと4キロほど。

すでに原爆投下の瞬間から10時間が過ぎて、夕方の6時をまわっていた。国道二号線も、市中に助けに向かおうとする人、ふとんや家財道具を持って市中から逃げる人、道端に倒れてしまった人たちが入り乱れて、大変な雑踏でした。その雑踏をかきわけるようにして歩いていくと、前方で、「しげのりつ！」と自転車に乗った男の人が叫んでいる。父だ。「あっ！おとうさん」「おまえ、生きとったかあ。死んどると思とったあ」

夜9時ごろになって、自転車のうしろに姉を乗せて父が戻ってきた。姉は爆心地近くの日銀の地下にいた。すぐに姉のからだをリヤカーのふとんの上に横たえ、家まで3キロの道のりを必死で運んだ。

姉は自分の目で、鏡に映る自分の姿を見てしまった。全身にやけどを負っているだけではなく、頭に三つぐらい穴のあいた姉の姿は、とても20歳の娘、とても人間の形相とは思えませんでした。なんとということか。瀕死の姉にわたしは醜い姿を見せてしまったのだ……。自分の姿を見てしまった姉は、「これは人間じゃない。人間の顔じゃない」といって泣き出した。

翌朝、5時過ぎになってやっと父が帰ってきた。徹夜の作業で疲れたのか、台所の板の間にあぐらをかいて座り、しばらくしていたが、いきなり正座をしなおしたかと思うと、私を呼びつけた。そして、「成徳、裏の畑へ行って、トマトをもうこい」といいつけた。「冷子はものすごくトマトが好きな子やから。」父はそうつぶやきながら、ジュースを絞り終わると、枕元について、吸い口を姉の口にあてた。姉はココクコとのどを鳴らしながら、「おいしい、おいしい」といって飲んだ。その後、姉は「おとうさん、先立つ不幸をお許しください」といい、息をひきとった。8月7日、午後9時40分……